

【活動報告書—2(先進地視察)】

1 活動名

(1) 小千谷市

- ア 「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ」の文化的複合施設
- イ 「おぢや震災ミュージアム」の防災学習施設、防災人材育成

(2) 長岡市

- ア 「アオーレ長岡」の中心市街地にある市役所庁舎との複合施設
- イ 「米百俵プレイス ミライエ長岡」の米百俵精神に繋がる人材育成の複合施設

(3) 燕市

- ア 「うさぎもちハレラテつばめ」の屋内こども遊戯施設

2 調査の目的

(1) 本市における課題

- ア 松本駅前から大型店が撤退し、令和 6 年度から「中心市街地の再設計・再活性にむけた取り組み」が進められ、令和 7 年 3 月に松本市中心市街地再設計検討会議から提言を受けた。
これを受け、令和 7 年度から、民間開発と連動するプロジェクトの検討、公民学が連携して進捗を管理する幅広い視点からの3つのプロジェクトの検討が進められている。
- イ 2030 基本構想、第 11 次基本計画に、松本城を核としたまちづくりに、松本城、松本駅、あがたの森公園に囲まれた中心市街地において、歴史的なまちなみ景観の保全と、新たな視点でのまちづくりが求められていると位置付けられている。
- ウ 結婚、出産、子育て支援充実として、子育て支援施設等の計画的な整備が位置付けられており、子供が安心、安全に過ごすことが出来る全天候型の子育て支援施設の整備計画を進めるとしている。
- エ 大規模災害時における危機管理体制の強化では、災害時の活動体制の強化として、情報収集や伝達、関係機関との情報共有、避難所の運営、被害調査の体制が必要としている。

(2) 調査の必要性

上記の課題における今後の取り組みの方向性を探るため、先進自治体の取り組みや、施設整備の状況の現場を視察する必要がある。

(3) 調査項目

- ア 文化的、人材育成の視点から整備された複合施設の在り方
- イ 中心市街地活性化と庁舎や複合施設の連携の在り方
- ウ 子育て支援施設の複合施設及び全天候型の子育て支援施設の整備の在り方
- エ 日頃からの防災意識を高める取り組みと次世代に継承する防災教育の在り方

3 調査地選定理由

(1) 新潟県小千谷市

- ア 令和 5 年 9 月オープンした「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ」は、にぎわい・交流・憩いの創出を目的として整備された複合施設
- イ 中越大震災の教訓を後世に伝える施設として整備、運営している「おぢや震災ミュージアム そなえ館」

(2) 新潟県長岡市

ア 長岡市の駅前中心市街地に、歴史と、文化、人づくりと産業拠点として建設された「米百俵プレイス ミライエ長岡」は図書館を中心に人づくりの拠点として運営されている。

イ 新世代の交流拠点となる長岡市役所と複合して駅前に整備された「アオーレ長岡」の建設の経緯と運営及び市民の交流と活動について

(3) 新潟県燕市

ア 屋内の子育て支援施設、こども遊戯施設として整備された「ハレラテつばめ」の施設概要と運営について

4 調査結果

(1) 実施日 令和8年1月18日、19日

(2) 出席者 6名 牛丸仁志、村上幸雄、中島昌子、こば陽子、和久井悟、西澤郁弥

(3) 新潟県、小千谷市、長岡市、燕市

(4) 成果、所感 別紙2のとおり

5 政務活動費

(1) 使途項目 調査旅費

(2) 支出額 300,164円

(日当 6,000円+宿泊費 14,800円)×6人=124,800円 旅費・交通費 156,060円
、研修負担金 6,000円、手土産 13,304円

成果・所感

1 小千谷市「ひと・まち・文化共創拠点ホントカ」

(1) 施設の目的と背景

小千谷市ひと・まち・文化共創拠点ホントカは、小千谷駅前の衰退により賑わい・交流・憩いの創出を目的として、図書館を核とした複合施設として、令和 5 年 9 月にオープンした。

特徴は、図書館と郷土資料館、市民の活動の場や子どもの遊び場を含む「共創」を掲げ、多様な人々が関わり、市民が主体となって、施設やまちづくりを進めるプラットホームとなっている。

図書館は、「フロート」と呼ばれる稼働書架や、「アンカー」と呼ばれる 9 つの空間があり、市民の様々な活動や交流が生まれるように設計されている。

また、山並みを創造させる「ルーフ」と呼ばれる屋根は、広場としても利用できる施設となっている。

(2) 成果、所感

人口 3 万人の小千谷市で図書館・全天候型子どもの遊び場・多目的スペースやカフェなどを備えた複合施設を視察した。

病院の跡地利用で建設された施設であったが、全体にゆとりがある明るい空間が特徴、大きなガラス張りの正面の大窓には八海山々を展望できる仕様になっており、この場所を利用することで郷土の環境を感じ、自然に郷土愛が醸成される場所になっていると思った。

図書館の内部は書棚も机や椅子も全て可動式で空間を自由に変えられる＝「フロート」とよばれるエリアと、あちこちに人が留まって活動出来る場所＝「アンカー」にゾーニングされており、空間や人々の交流や流れを生むと同時に人々の固定的な活動の場所も確保する造りとなっており、地域の方が様々な形で交流・活動するための仕掛けが施された施設だった。

図書館機能のみならず、屋内の子ども遊び場は全天候型で、冬季に外で遊ぶことができない親子が集う場所も併設していた。子育て世代が頻繁に利用できる場所があることで、そこで遊んだ子どもたちは幼少期の行き慣れた「ホントカ」で、成長してからも親しみを持って通うであろう流れが想像され、地元の市民が長期にわたりこの施設を活用して成長していく姿が描かれていた。

また、2階建ての屋上に車が上げられるスロープがあり、キッチンカーなどが入ってイベント等を行うことが出来る点も注目に値した。屋内の利用だけではなく、屋上を活用してイベントや交流の機会を設けることができることで、図書館そのものは利用しない層も取り込むことを可能としていた。

一つの施設で「図書館」「全天候型子ども広場」「学び・集いスペース」「イベントスペース」など複数機能を兼ね備えており、多世代交流を実現する複合施設の成功例であった。

本市でも全天候型の子ども施設は常に要望があがり、その実現に向けて検討する際の参考事例として大変意義がある視察となった。

2 小千谷市「おぢや震災ミュージアムそなえ館」

(1) 施設の設置目的と背景

2004 年の中大越震災の教訓を伝えることを目的とした施設

設置目的は、震災体験の伝承として、中越大震災の被害や教訓を後世に伝える。防災意識の向上として、災害への備えについて学習し、防災意識を高める。防災人材の育成として、地域を担う防災人材の育成を支援する。また、中越メモリアル回廊の一翼として、小千谷市と長岡市の震災関連施設を結ぶ「中越メモリアル回廊」の一部として機能している。

運営は、一般財団法人小千谷産業開発センターが行っている。財源は、市からの補助金

(2) 成果・所感

2004年に起きた中越地震の震災ミュージアム「そなえ館」を訪問。中越地震は、最大震度7の記録だが、本震のあと震度5弱以上の地震が3時間に11回もあったとのこと。震源の深さも13キロと浅く、強烈な揺れだった記録が残されていた。家の中の様子、避難所の様子も残されており、災害の大きさを目の当たりにした。地震体験をする設備もあり、中越地震の大きさを体験するものや、地震のタイプやいる場所により異なる揺れを体験出来る設備等があった。

松本市の私たちが参考にしなければいけないのは、内陸の断層型の地震であるということ。糸魚川―静岡構造線が縦断する松本は、同様の災害が起こる可能性があり、参考になることが沢山あった。改めて地震への備えを見直すこと、市民理解を図ることの大切さを認識した。

3 長岡市「アオーレ長岡」

(1) 施設の設置目的と背景

ア 市役所と市民施設の複合化

長岡市は、3度の合併により旧本庁舎が手狭と、中越大震災で耐震性が不足し、分散した役所の機能を中心に集めるため、新庁舎の建設が必要になった。

アオーレ長岡は、市役所機能と市民交流施設が一体となった全国初の複合型施設で、JR長岡駅から大手スカイデッキで、直接的に徒歩3分でつながっている。

市民生活の温もりと賑わいにあふれた「まちの中土間」をコンセプトに、防災拠点、市役所機能の集約、駅に隣接し中心市街地の活性化、市民協働と交流の推進を図るためのイベント施設として整備された。

イ 中心市街地の活性化と市民活動

市民協働のまちづくりが基盤に、良い空間は、生活の質の向上に良い影響を及ぼす、アオーレの空間は、市民活動が一気に覚醒し、市街地内の連携と回遊性を高め、新しい価値を創造する拠点へと進化していく。

(2) 施設の概要

ア 施設の概要

設計は、建築家の「隈研吾氏」に委託し、地元長岡城の市松模様や越後杉等の地元木材を活用し、行政と市民の密接な連携を象徴している。

市役所庁舎、市議会議場(1F)、アリーナ(5000人収容)、屋根付き広場(ナカマド)、市民交流ホール、シアター等の複合施設

イ 運営方法

NPO法人ながおか未来創造ネットワークが運営を行い。市民力を活かした運営に取り組んでいる。

市民の使いやすさを徹底的に追求し、ルールを作らない自由度の高い運営を実現している。

安く、長く、自由に、飲食も、販売も、市民目線での運営

(3) 成果・所感

アオーレ長岡は、隈研悟氏が設計しアオーレ長岡のコンセプトは市民の「会いましょう」という方言に由来する「人と人、人とモノ」の出会いとにぎわいを創出する「まちのナカドマ(中土間)」で、設計する際に行政と市民活動の場が「市松模様」のように混ざり合う開かれた温もりのある施設を目指しており、実際にアオーレ長岡の至る所に地場産の杉材を用いた「市松模様」が施設内や議場内に配置されている。

次に主な特徴としては、長岡駅からアオーレ長岡まで直結で行け、コンセプトである「市の場」の「ナカドマ」やアリーナと市役所本庁機能を一体的に配置している。

また、長岡市役所は分散化している。

その背景は長岡市中心市街地活性化基本計画の一つ「まちなか型公共サービス」の展開に基づき行政機能を中心市街地の複数の拠点に配置し街の活性化や市民の利便性向上の二つの意味がある。

一方本市では、現在、中心市街地活性化や新庁舎等の計画が進められている状況。

中心市街地活性化の取り組みとして、どのように街中に足を運んでもらうようにしてもらうかと考えた時に、「アオーレ長岡」の「人と人、人とモノ」が重要となり行政と市民が分け隔てない市民活動の場の提供が必要不可欠だと感じた。

松本市役所の新庁舎計画では、スリム化を目指し地域づくりセンター等での身近な相談窓口を目指している。

しかし、長岡市役所はあえて分散化にすることで行政窓口に行くついでに街中に足を運ぶ仕組みにし、中心市街地活性化に結びつけている。

加えて、アオーレ長岡は市が管理しているのではなく、官民協働で運営されており、民間のノウハウを取り入れられており、長岡市の「米百俵の精神」に基づく「ひとづくりはまちづくり」と、ひとを育てながら街の発展に繋げていると感じた。

4 米百俵プレイス ミライエ長岡

(1) 施設の設置目的と背景

ア ミライエ長岡は、長岡市の中心部にある「ひとづくり・学び・交流」の拠点施設

長岡の米百俵の精神を受け継ぎ、新しいスタイルの図書館や起業支援施設などを備え、地域のにぎわい創出を目指している。

イ 建設の背景は、昭和の時代は、大型百貨店と個人の商店だったが、大型店が撤退した。それまでは、民間主導だった。

その後、建物を市が引き継ぎ、隣接に合った商工会議所、銀行もあり再開発を進めてきた。

この施設は、行政機能の分散配置と、健康医療、教育、文化芸術の施設とする方向を、市民ワークショップによって議論した。

ウ 基本方針は、「人づくりと産業振興」を総がかりで支える地方創生の拠点としており、目指すコンセプトは、米百俵の精神(未来への投資)、互尊独尊(修養の場の重要性)とし、新しい学び

や情報を得られる機能を導入し、幅広い世代が集い、交流することで、新しいチャレンジの機会に出会える場を目指し、また、新たな価値を創造する。

(2) 施設の概要

3つの役割、「人づくり・学びの場」「産業づくり・交流の場」「にぎわい」とし、未来を明るく照らす人づくりと米百俵の精神を未来へ続く願いが込められて、ミライエ長岡と命名された。

西館が、令和4年7月にオープンし、東館は令和8年秋完成予定

西館は、新しい図書館(互尊文庫)、ミライエステップ(270インチの大型スクリーン、定員100名)、ものづくりラボ、スタジオA・B、ギャラリーラボ、イノベーションサロン(産官学の新規プロジェクト創出、コワーキングスペース他)

東館は、ティーンズラボ、グランパサージュ、ミライエテラス、トオリニワ、レストランが設置される予定となっている。

(3) 成果・所感

ミライエ長岡はアオーレ長岡と同様に長岡市中心市街地活性化基本計画で「人づくり」と「産業振興」を総かがりで支える地方創生の拠点として、「米百俵プレイス ミライエ長岡」令和8年度中に全館オープンする予定となっている。ミライエ長岡は本来の図書館機能と違い、「学びと文化の機能」「産業振興・イノベーションの機能」「交流とイベントの機能」の3つの機能があり、自習・ワークスペース、イノベーションサロン、3Dプリンターやレーザーカッターなどを備えた「ものづくりラボ」や多目的ホール等の環境が整備されている。

本市では、「サザンガク」などがある中、図書館機能を旧パルコ内に施設を配置する予定だったが白紙に、「人づくり」や「人を育てる」を場所として、多機能図書館が注目されている昨今、図書館を核としたまちづくりを進めていく上で時代にあった図書館機能を目指していかなければならないと改めて感じた。

米百俵の精神を次世代に引き継ぐ取組みは、人づくりを主体に施設整備を行い、多様な世代にアプローチする取組みをソフト面で実施しており、中心市街地の活性化、回遊性、ひとづくり、交流とにぎわいの場を作り上げた施設であり、本市のえきしろ空間の取組みの参考にすべきと思う。

5 燕市「ハレラテつばめ」

(1) 施設の設置目的と背景

ア 燕市は、日本海の地域であり、冬季間において、天候の悪い日が多く、夏場は全国的に見ても猛暑日も増加傾向にある。この気象条件から、子どもたちが屋外で遊ぶことが困難になってきた。

また、子どもが体を動かす機会が減っている。

イ 第2期燕市子ども、子育て支援事業計画のニーズ調査から、子どもの遊び場へのニーズが高く、屋内型の遊び場の要望が特に高かった。

ウ このことから、市民ニーズに応え、子どもたちの健やかな成長に資するため、屋内こども遊戯施設を整備した。

エ 基本方針は、「誰もが楽しめ、みんなに愛され、まちのひろば」、計画の3本柱は、「みんながワクワクする広場」、「子供の成長を後押しする場」、「子育て世代が安心できる場」

(2) 施設の概要

ア 敷地面積 10,316 m²、延べ床面積 1,485 m²、地上 2 階建て

イ 施設の特徴

子どもたちの成長に合わせた3つのひろば、「よちよちひろば」「すくすくひろば」「わいわいひろば」が、体格、運動機能、成長度合が異なっても、それぞれの成長に応じた遊びが出来る。

小さな子供たちから年上の子供たちの遊びが見えるレイアウトとしている。より活発なチャレンジしたくなる環境

インクルーシブな遊び場、施設予約、入場システム及びプレイリーダーを配置している。

ウ 運営方法

指定管理者制度、輝く燕こども未来グループが運営

エ 利用料

市民の子ども、大人＝無料

市民以外子ども ＝ 400 円

市民以外大人 ＝ 300 円

利用料総額 17,650 千円／年

(3) 成果・所感

新潟県燕市にて令和7年9月に供用開始となった「うさぎもちハレラテつばめ」は、雪の多い地域に要望されている、全天候型こども遊戯施設。少子化対策、子育て世代の流出対策として市民および議会からの要望を受けて実現した。

基本構想から供用開始までわずか5年で完成。これにより、短期的には近隣の新潟市や長岡市の遊戯施設への流出、ひいては長期的な他都市への人口流出を防ぐことを目的とする。

施設は 0 歳～12 歳の子どもとその保護者が対象。

市民の利用料は無料で、市街から来た市民の家族で、祖父母の所に帰ってきた子どもや孫も無料の対象に含まれる。子どもに身に着けてほしい「運動神経がよくなる 36 の動作」が身につくような施設になっており、プレイリーダーが常時子どもたちの見守りと指導をしてくれる。予約制、完全入れ替え制で「満員で入れない」「来たはいいが行列に並ぶ」などを解消し利便性の向上を図る。

小千谷市「ホントカ。」とともに参考になる施設であったが、子ども遊戯施設に特化していたため、年代を経て利用者・利用率がどのように変化していくのか、また設備や用途を時代に合わせて変えていく必要があるのではないかなどの懸念も残った。